



筑紫女学園大学リポジット

The Construction Activities of Mongol Invasion
Monuments Organized by the Superior Priest
Gojun SHICHIRI of the Mangyoji Temple, Hakata

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-01-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田鍋, 隆男, TANABE, Takao メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/1005

博多萬行寺七里恒順師の元寇紀念碑建設運動

はじめ

かつての元寇古戦の地で十里松原（千代松原）といわれ、今は福岡県庁および県警本部が立地している東公園（福岡市博多区）に、龜山上皇像（福岡県指定文化財）と日蓮上人像（福岡市指定文化財）の大きな銅像二基が聳え立っている。どちらも元寇紀念碑として造立されたもので、前者は博多出身の彫刻家山崎朝雲¹が木彫原型²を制作し、佐賀藩御用鋳物師であった谷口清八³・谷口源一郎⁴（佐賀市長瀬町谷口鉄工場）らが鋳造し、明治三十七年（一九〇四）十二月二十五日に除幕式がおこなわれた。後者は熱心な日蓮宗徒であった彫刻家竹内久一⁵が木彫原型を制作し、頭部と手の一部を東京美術学校教授の鑄金家岡崎雪聲⁶が、残り胴部等を同じく日蓮宗徒の谷口清八（谷口鉄工場）らが鋳造し、前者より一か月余早く同年十一月八日に除幕式が挙行された。

元寇紀念碑建設の発端は、福岡県警部長湯地丈雄⁷が所管内の元寇遺蹟に見るべきものが少なく、勇将烈士の激戦奮闘によって国が護られたことが忘れ去られていることを憂い、これに長崎事件が重なって

愛国心高揚および護国思想育成のため、一大記念碑建設を發起したことによる。さらに九州巡歴の途次に來福した日蓮宗僧佐野前助師⁸が湯地丈雄から建碑の美挙を聞き、元寇を予言し立正安国論を著し掃敵祈願したのは宗祖であるとして、その碑に日蓮上人の肖像を付けることを提案した。この案は一



図1 龜山上皇像（福岡県指定文化財）

田鍋隆男



図2 日蓮上人像（福岡市指定文化財）

且合意されたものの、他宗派の反対にあつて叶わず、単独の元寇記念日蓮上人銅像を建設することになったのである。

明治二十一年（一八八八）

四月、地元紙福岡日日新聞に発起人六〇人による元寇記念碑建設募集広告が掲載され、その発起人一覧のなかに博多萬行寺住職の七里恒順師の名があつた。恒順師は建碑を成功させるために元寇記念演説会を主宰し、自ら「賛成の意を選ぶ」という演題で講演をおこなつて満場の聴衆の支持を得るなど、積極的に建碑活動をおこなつた。しかし三年後に中風を罹り、長い闘病のち元寇記念碑の完成を見ずに明治三十三年一月二十九日に帰寂した。わずかに四年間の短い元寇記念碑建設賛助活動であつたが、この稿ではほとんど知られていない七里恒順師と建設運動との関わりを紹介する。

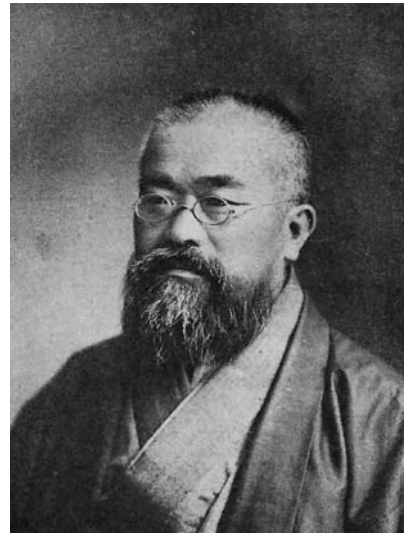


図3 湯地丈雄
(仲村久慈『湯地丈雄』より)



図4 佐野前励
(菅上五十遠忌報恩会『菅上小傳』より)



図6 七里恒順
(筑紫女学園大学ホームページより)



図5 元寇記念碑建設募集広告(部分)
(福岡市博物館所蔵)

元寇記念碑建設運動

明治十七年（一八八四）十二月に朝鮮において親日派のクーデター、いわゆる甲申事変が起きた。これに対し朝鮮半島に勢力拡大を画策していた清国は、窮地に陥った国王の要請を受けて軍隊を派遣し、その結果日本軍は劣勢となり金玉均ら親日開化派は長崎へ亡命することになった。翌年正月に井上馨外務卿が全権大使になって軍艦七艘を率いて仁川に上陸、その勢いで京城（現・ソウル）に入り朝鮮と漢城条約を結び、さらにベトナム方面で仏軍に敗北を喫しその事後処理に手間取っている清国と天津条約を結んだ。そのような動きの日清関係のなかの明治十九年八月十五日、長崎港に入った清国北洋艦隊の大型軍艦四艘から上陸した水兵三〇四〇〇人の水兵が、強大な軍勢力を背景に傍若無人に丸山廓あたりで騒乱を起こし、この回に限らず清国海軍水兵は日本に入港するたびに問題を起こしていたので、警戒していた巡查との間で衝突事件を起こした。この騒乱で清国水兵四人が死亡し三〇余人が重軽傷を負い、一方わが国の巡查側は死者一名、重軽症は二八〇九人の犠牲者を出した⁹⁾。これが長崎事件である。

歴史的にわが国が文永十一年（一二七四）と弘安四年（一二八一）の二度にわたって元（蒙古）軍の襲来を受け、その史蹟が荒廃しているのを憂慮していた湯地丈雄は、この長崎事件の報を聞くや早速八月二十二日には長崎へ出張し現場を視察¹⁰⁾、同業の警察官に犠牲者が出たこともあってこれを蒙古襲来の再現と憂いた。福岡日日新聞社も日清関係の重大な時期であると考慮し、事実を精確周密に報道するため

記者神吉秀成¹¹⁾を長崎へ派遣した。当時は極東に進出し南下してくるロシアの脅威と重なり、極東の緊張が高まっている時期で、湯地丈雄は愛国心高揚のため護国思想育成のため元寇記念碑を建設することを発起し、明治二十一年二月に元寇記念碑建設事務所を福岡くらぶに設置し¹²⁾、全国的に建設費募集活動を展開していくことにした。各地で講演をおこなうときには、幻燈機¹³⁾を使って視覚的に解かりやすく訴え、明治二十七年以降は事業に賛同した画家矢田一嘯¹⁴⁾が描いた蒙古襲来の大画面の油絵を使って講演をおこない、一人でも多くの賛同者、一円一銭でも多くの義捐金が寄せられるように尽瘁し、同二十八年まで全国を歴遊して国防精神を鼓吹した。

明治十九年に第九代福岡県知事になった安場保和¹⁵⁾は、明治四年の岩倉具視らの遣欧米視察団の随員として参加しており、欧米先進国の広場や公園には偉人を顕彰し今後の示唆を得ることがあるモニュメント（銅像）が建立されているのを目の当たりにしていた。したがって、当時において安場県知事は他の誰よりも記念碑の意義について最も具体的な理解者であったと思われる、元寇記念碑建設に賛意を示し、福岡区長中山立木や第十七国立銀行頭取小河久四郎ら多くの福博の政財界人らとともに発起人のひとりとして、明治二十一年四月の新聞紙上に掲載された『元寇記念碑建設費募集広告』¹⁶⁾にその名を連ねた。そして恒順師もまたその発起人連名六〇名のなかに名を出しており、他に僧侶は勝立寺（日蓮宗）住職加藤日龍がいた。

恒順師は活動初期において津田信秀¹⁷⁾、江藤正澄¹⁸⁾、渡邊壇¹⁹⁾、香山俊久²⁰⁾の諸氏とともに主に斡旋奔走の労を執り、初期のころは他の

発起人に比べ積極的に助力している²¹⁾。この頃に元寇記念碑建設事務所が全国に発送した『元寇記念碑建設費募集広告』には全国の発起人五二九名と多くの賛同者が名前を連ねているが、その多くは政財界で活躍している著名な実力者である。その九州の発起人八九名のなかで社寺関係者の名を列挙すると英彦山神社宮司高千穂宣麿、太宰府神社宮司西高辻信巖、称名寺（時宗）住職河野智眼、勝立寺（日蓮宗）住職加藤日龍、聖福寺（禅宗）住職龍淵東藏、そして萬行寺（浄土真宗）住職七里恒順である。

その年の十一月、九州各地を巡錫していた日蓮宗僧佐野前励師が湯地丈雄を訪問し、元寇の国難を予言しこれを打ち払うために念力をつくしたのは高祖日蓮大師で、その愛国の大勇猛心は今日に至るまで門末信徒の忘るべからざるものであるから、湯地丈雄の快挙に是非とも一臂を添へなくてはならぬと申し出た²²⁾。この日から前励師はその説法のために元寇の国難史を説き、丈雄の建碑事業に蔭ながらの力を添へ、それと同時に、その元寇記念碑とならべて日蓮上人の銅像を建立するため、九州は勿論全国の信者に呼びかけるため地方巡歴をおこなう寧日はなかったという²³⁾。湯地丈雄と佐野前励師が合意した元寇記念碑は、碑に日蓮上人の肖像を付けるというもので、日蓮宗務院の論告書にも「宗祖ノ肖像ヲ彫刻シ以テ不朽ニ伝ヘント欲ス」とあったが、他宗からの反対が激しく結局佐野前励師は別に日蓮上人の単独像を建設する事にし、門徒から浄財金および古鏡を集める事にした。

明治二十二年（一八八九）三月二十六日西本願寺第二十一世法主大谷光尊師²⁴⁾が熊本県下巡教の途次、太宰府に立寄り一泊することに

なった。御親教や剃刀式がおこなわれるということで七里恒順師をはじめ各寺住職や瓦町の崇信教校の生徒、門信徒らが太宰府にて奉迎することになった²⁵⁾。もし法主が建碑事務所から送付された広告を見れば、法主と恒順師の間で建碑が話題になったであろうと想像される²⁶⁾。

六月九日に挙行された陸軍招魂祭に、西本願寺法主大谷光尊師の代理として連枝日野澤依師²⁷⁾が来福した。澤依師はすでに送られてきた広告を見ていたと思われ、翌十日福岡県警部長湯地丈雄宅を訪れ、元寇記念碑建設の拳は我国の美拳であると随行員土井普應とともに賛成し発起人に加盟した。さらに帰京して光尊法主にも充分にお話をして発起人になるようお勧めすると述べている。この日の午後、本堂から寺門まで多くの信徒で埋めつくされた萬行寺の説教場において、僧侶への戒や護持会員との面晤に続けて元寇犠牲者のために読経をおこない、さらに元寇記念碑への賛意を述べた。それはいやしくも日本国民にして愛国心あるものは応分の義捐を為してこの拳を賛助すべきという旨の演説であった。そして後日、事務所宛てに澤依師より義捐金一〇〇〇円が寄送された²⁸⁾。かつて大谷光尊法主に呼ばれ本山にて執行として二年間その辣腕をふるい、明治十五年に萬行寺に戻った恒順師にとって、連枝の言動は恒順師の背中を大きく押したと思われる。

七月、元寇記念碑建設事務所は再び建設資金募集のために「元寇記念碑建設義捐金募集広告」(参考1)を作成し全国に配布した。当然、そこに掲載された地元発起人八九人のなかに七里恒順師の名もある。

明治二十三年一月二十五日、恒順師は福岡橋口町（現・福岡市中央

区天神四丁目) 勝立寺(日蓮宗)において、自ら八人の弁士とともに元寇記念碑大演説会を開催した²⁹。弁士および演題は七里恒順師の「賛成の意を述べ併て諸氏に勧告す」を筆頭に、津田信秀の「敢て宝を捨る勿れ」、川村惇³⁰の「後世子孫は如何」、秋元喜太郎の「石塔論」、それに香月恕經³¹、河野智眼³²、津田利夫³³、大庭弘³⁴、萩原種介³⁵といった弁士が顔をそろえた。幻燈機は映写効果のために日没を待つて午後六時から開演し、説明は弁士によっておこなわれた³⁶。幻燈の参観者は午後七時には一五〇〇人を超え、堂内は立錫の余地なく満杯状態で、やむを得ず門を閉めて入場制限をおこなったが、門外には多くの人で溢れるほどの人気であったという。幻燈は先ず導入部として九州鉄道の沿線景色に始まり、次いで第二「今津沖に元艦を見るの図」(説明弁士は大庭弘)、第二「元賊対州へ上陸の図」(同津田)、第三「鎌倉殿中評定の図」(同秋元喜太郎)、第四「元賊今津松原等に合戦の図」(同萩原種介)、第五「龍ノ口元使斬殺の図」(同大庭弘)、第六「元賊対州上陸島民難義の図」と第七「龜山上皇と祈願の図」(二面とも同北川又七郎)、第八「河野道有勇戦の図」(同香月恕經)、第九「元艦博多湾襲来の図」(同萩原種介)、第十「同覆没の図」(同藤野良蔵³⁷)、第十一「記念碑落成式想像図」三面(同大庭弘)が上映された。なかでも最後の第十一面の未来に関する大庭弘の説明が人々に大きな感動を与へ記念碑への関心を高めて拍手喝采であったといふ³⁸。

二月四、五日の両日は恒順師が会主となつて、狹隘な寺堂では大観衆を収容できないということで、東公園にある劇場教楽社を貸切つて

幻元寇大演説會

來ル廿五日(即ち舊曆口町勝立寺ニ於テ)正午十二時開會元寇ニ關スル演説會

辨士

七里恒順 香月恕經 河野智眼
 津田利夫 河村惇 秋元喜太郎
 大庭弘 津田信秀 萩原種介
 全日午後六時ヨリ幻燈機説明者辨士中ヨリ出

『福陵新報』 1890(明治23)年1月24日 4頁

幻元寇大演説

來ル四五兩日間博多教樂社ニ於テ正午十二時開會元寇ニ關スル演説會

辨士

萬行寺事 稱名寺事
 七里恒順 河野智眼 大庭弘
 川村惇 香月恕經 秋元喜太郎
 津田利夫 宮武隆貞 津田信秀
 萩原種介 藤野良蔵
 全日午後六時ヨリ幻燈使用者三苦利三郎

會主 **七里恒順**

『福陵新報』 1890(明治23)年2月5日 4頁

元寇大演説会を開催することにした。四日初日の演題と弁士は、第一席「根元論」（津田信秀）、第二席「犯意燈明台」（宮武隆貞）、第三席「元寇歴史論」（大庭弘）、第四席「一挙兩得」（河野智眼）、そして最後の第五席を恒順師が「賛成の意を述べ」と題して建碑運動に対する賛成意見を述べたのであった。夜になると例の幻燈会がおこなわれ会場は前回同様に満杯状態であったが、会場を劇場に変更していたので事なきを得ることができた³⁹。新聞には聴衆一〇〇〇余人を感動させたと報じられている⁴⁰。

二日目の五日は午後二時過ぎより開会し、演題および弁士は「根元論」（津田信秀）、「期する処独立権」（宮武隆貞）、「日本の広告」（秋元喜太郎）、「元寇歴史既に共同力に及ぶ」（大庭弘）、「元寇歴史を読む」（津田利夫）、「儘になる工夫」（河野智眼）、「器械の利用」（香月恕經）、そして最後に恒順師が前日同様に「賛成の意を述べ」という賛同演説をおこなった。その内容については残念ながら見出せず不明である。続いて同夜の幻燈の内容および説明者は「歴史」（宮武隆貞）、「今津沖に元艦を見る図、鎌倉評定和親論」（北川又七郎）、「対馬へ元賊上陸の図、箱崎今津松原等にて対戦の図」（大庭弘）、「龍ノ口に元使を斬る図」（宮武隆貞）、「元賊対州に上陸逆意違ふする図」（北川又七郎）、「龜山上皇石清水に祈願の図」（宮武隆貞）、「河野道有勇戦の図」（大庭弘）、「賊船博多湾襲来の図」（荻原種介）、「賊船颶風に遇ひ覆没の図」（大庭弘）、「記念碑起工式と落成に至る図三面」（藤野良蔵、大庭弘）で、同時に疲れた脳を解きほぐすが如くその間に諸種の動物や九州鉄道沿線の景色などの幻燈も上映された⁴¹。毎回同様に最

後に記念碑竣工のお話で終了するのであるが、幻燈の映写技師は当時の福岡写真界の泰斗三苦利三郎⁴²が担当した。七里恒順師と写真師三苦利三郎の交流も興味深いところである。

三月十一日、那珂郡千代村の東公園競馬場の東隣一〇〇〇坪に元寇記念碑建設の許可があり⁴³、十九日には元寇記念碑の石材として利用するために、市内にある福岡藩時代の旧薬院門および赤坂門の石垣崩しが始まった⁴⁴。そして四月二日に元寇記念碑の起工式が執行されるのである⁴⁵。

六月、福岡第二十四聯隊の招魂祭法会のために来福した東本願寺大谷勝尊師⁴⁶が、元寇記念碑に関心を示し法会の後、営所内に設置された外寇遺物展覽場へ立ち寄ることになった。招魂祭委員の津田信秀は元寇記念碑建設事務所事務委員でもあるので、外寇古器物に関し懇切丁寧に説明をおこない同師も委細について尋問し、さらに陳列品中で興味をもった三、四点を希望して手に取り熟覧した。最後には土産として元寇敗殲の図および元寇記念碑の石版画六、七枚を請われたので、直ちに津田は贈呈することにした⁴⁷。さらに元寇記念碑建設事務委員の香山俊久と木山惟貞⁴⁸は、大谷勝尊師が滞錫している博多川口町妙行寺（大谷派、戦後に福岡市南区野間に移転した）を訪れ、随行の長桶に面会して元寇に関する書籍数部を勝尊師へ進呈している⁴⁹。

建碑の主唱者湯地丈雄は三月二十二日に官を辞職し、元寇記念碑建設に専念することにした⁵⁰。その献身的な奮闘によって全国各地の賛同者から建設義捐金が寄せられ、さらに複数の宮様から特別賛助の通知をいただき、宮内庁からは金一〇〇〇〇円の恩賜の栄を荷う⁵¹など募

金活動は確実に着々とおこなわれた。一方の佐野前助師が日蓮上人銅像建設資金募集活動を本格的に始動するのは明治二十三年十一月からで、翌年には九州一円を巡化しこちらも熱心な僧侶や門信徒の協力を得て着実に募金活動がおこなわれた。

ところが明治二十五年（一八九二）の第二回衆議院議員総選挙において、内務大臣品川彌二郎による政府系候補者を当選させるための大々的な選挙干渉がおこなわれた。これに呼応した福岡県知事安場保和および警部長中原尚雄は記念碑建設委員長の地位を利用して、建設義捐金を流用して大々的に選挙干渉をおこない定数九人のところ政府系候補者八人を当選させた^⑧。これにより建設資金が枯渇し事業推進は非常な打撃を蒙り一時中止の止む無きに至った。とはいえ宮内省よりの恩賜金をはじめ、著名な政財界人から無名の庶民に至るまでの多くの賛同者から義捐金を集めた以上元寇記念碑建設事業を完遂させなければならぬ。明治三十二年にその委員長となる第一四代福岡県知事深野一三は事業困難の状況を佐野前助師に告げ、碑の頂上に奉安するは日蓮上人を迫害した武将北条時宗でなく、国家安寧を祈願した亀山上皇尊像であり、その原型彫刻および鑄造や運搬の諸費用などについて相談をもちかけた^⑨。そこで前助師がその要望を受け入れたことにより、明治三十五年九月に山崎朝雲による亀山上皇像の木彫原型が完成するに至った。ところが前助師もまた宗門の紛擾に巻き込まれるなど日蓮上人銅像建設事業も一時期困難なときがあったが、危機脱出後は竣工にむけ尽瘁した。深野知事の後をついで明治三十五年（一九〇二）一月に就任した第十五代福岡県知事河島醇も元寇記念碑が竣

功するよう尽力し、明治三十七年の除幕式をむかえたのである。河島知事は日蓮上人除幕式の二日後に元寇記念碑建設事務委員長として佐野前助師に感謝状と金属製香炉を贈呈している^⑩。

七里恒順師について

濱口恵璋編『七里和上言行録』（興教書院 一九一二年四月）によると、七里恒順師は天保六年（一八三五）七月十一日越後国三島郡飯塚（現・新潟県長岡市飯塚）にある明鏡寺にて、住職井上宗鏡の二男として誕生した。しかし実母は幼いときに他界したために賢明な姉に育てられ、幼くして三経や四書を習学したという。弘化二年（一八四五）十一歳のときに明鏡寺にて得度。嘉永元年（一八四八）十四歳のときに同国中頸城郡姫河原（現・新潟県妙高市姫川原）正念寺^⑪の僧朗勤学^⑫に入門。翌嘉永二年には同国三島郡本与板村（現・新潟県長岡市与板町本与）光西寺の宣界司教に業を受けた。僧朗は七十九歳の高齢で、宣界は三十九歳であった。宣界のところには五年間業を受け、安政元年（一八五四）五月の二十歳のときに豊前下毛郡今津村（現・大分県中津市今津）浄光寺の月珠勤学の門に入った。しかし安政三年（一八五六）十一月に月珠が帰寂したために月珠門下の同郡草本（現・大分県中津市山国町草本）教順寺の助教宣正師に、さらに安政五年（一八五八）正月には同郡福島（現・大分県中津市福島）長久寺の田丸慶忍師に就いて業を受けた。さらに文久二年（一八六二）七月の二十八歳のときに豊後国玖珠郡戸畑村（現・大分県玖珠郡玖珠町戸畑）満福

寺の南溪師のもとで二年間修学している。当時の世情は幕末期の騒然としていたところで、さらに宗門に対して種々の論難や迫害があつており、恒順師はそれらに猛然と立ち向かい護国扶宗を双肩に負つていた。その間、安政四年には本山の学林となり、元治元年（一八六四）五月には仏教排斥論者の福沢諭吉と大いに論戦をくりひろげた。

元治元年十一月十三日に越後の宣界和上の斡旋により、筑前国博多下祇園町（現・福岡市博多区祇園町）萬行寺に入寺することになる。萬行寺にはかつて曇龍師^㉔という高僧がいて、私塾甘露窟を経営して多くの名星を育て上げていたので萬行寺の名は全国に知られていた。しかし天保十二年（一八四一）に曇龍師が病没するとその寺勢は衰退し、それ故甘露窟再興を期待されて恒順師は迎えられたのである。

慶応元年（一八六五）十月二十七日に萬行寺住職となつた恒順師は、同三年六月には甘露塾を再開して龍華教校と改名し宗門の教育事業に尽瘁した。そのころ世情は幕末の動乱を経て明治維新となり、明治元年（一八六八）に発せられた神仏分離令による廢仏毀釈運動がおこり、全国の寺院が破却されたりした。恒順師は社会公共事業に取り組みため国恩会を創設。明治九年（一八七六）には百日講を設け師匠の田丸慶忍師を招聘して、俱舍論の講義を開催するなど僧侶の学問向上を謀り、引き続き道俗の法義を振作するための要籍会、中流社会に宗教心を鼓吹するための恵以真会や開明会を、さらに各寺の坊守の信仰および品性の向上を図る坊守講などを開設した。このように仏教排斥の大荒波に猛然と立ち向かい宗門擁護の活動は途切れることは無かつた。自身は明治七年（一八七四）八月十九日に中講義、翌年一月十五

日には大講義となるが、恒順師が上京していた明治八年七月十七日、萬行寺の本堂と庫裡が焼失した。急ぎ帰寺した恒順師は同年十月に博多小山町（現・福岡市博多区御供所）の東長寺（真言宗）の本堂を購入。それを移築して再建に全力をそそぎ、その間の学生の教育や法話は一日も欠かさなかつたという。

明治十年（一八七七）、中央では行政改革によつて教部省が廃止され、さらにこの年に西南戦争が勃発。翌年には東京築地本願寺別院の本堂上棟式に上京した大谷光尊法主に重用された北畠道龍^㉕が、本願寺改革を企て本山の東京移転を主張したことによつて京都の大洲鐵然^㉖と対峙することになった。明治十三年四月に恒順師は光尊法主から呼び出されて本山に赴き、執行の職について約二年間かけて事態の収束を図ることになった。明治十三年九月には権少教正に補せられるも辞退し、十二月には又もとの大講義になった。明治十五年一月に執行を辞して帰郷。その後もたびたび法主の要請があるのだが、明治十七年十月と明治二十四年の顕如上人三百回忌法会上に上洛したぐらいで、博多萬行寺で朝は甘露窟にて学徒を提擲し、昼は諸国より群参して法を求める者に接し、夜は一般の法話をするなどの日々々に専念した。明治十九年に古家を購入して庫裡とし、焼失後続いたわずか十八畳の狭い甘露窟での生活を終え、大いにはばたく基礎を整えた。同年一月恒順師は前年暮に福岡商法会議所内に発足した地元政財界人の親睦会である福岡くらぶ^㉗の会員になつている^㉘。会員になつた理由は不詳だが、その集会在翌月に萬行寺で会員一七〇名が参加して開催され、会長に福岡区長山中立木が選出された。その数日後には新赴任の

県知事安場保和と書記官廣橋賢光の福岡くらぶ主催歓迎会が西公園で開催されている。このふたりは後の元寇記念碑建設事務所の委員長と有力事務委員である。恒順師が元寇記念碑建設の発起人に名を列ねる環境は順次整えられていたのである。同年八月に長崎事件がおこり、明治二十一年には元福岡県警部長湯地丈雄が提唱した元寇記念碑建設に賛同し、建設費募集広告の発起人に名を連ねた。連名および義捐金醸出だけの発起人が多いなかで明治二十三年には自ら演説会を主宰し⁶²、その案内状を各人へ発送しさらに新聞広告を掲載して⁶³案内するなど、さらに金一〇円を寄付しており元寇記念碑建設のために尽力するのであるが、明治二十六年（一八九三）に中風を罹患。そして長い闘病の後明治三十三年一月二十九日に帰寂する。享年六十五歳であった。

あとがき

明治二十二年、当時岡倉天心とともに最も文化財に精通していたと思われる帝國博物館総長九鬼隆一へ発起人のひとり⁶⁴が、『元寇記念碑建設費募集広告』を送付し意見を求めている。その返書には碑の図案をみて高さ一〇〇尺は高すぎるし海風にさらされ荒廃しやすい、ナポレオン像みたいな騎馬像は日本人好みではなく地震に弱い、銅像は国民に元気を鼓吹するばかりでない⁶⁵ので、明治美術の大作として後世に伝えられるよう一流の名工に托することが肝要であるなどをアドバイスしている⁶⁶。その教示によって博多出身でもあるが、高村光雲の弟子

であり、東京彫工会や日本美術協会で活躍していた山崎朝雲が亀山上皇像原型を、そして日蓮宗徒でもあるが、岡倉天心にその技を認められ東京美術学校教授となった竹内久一が日蓮上人像原型を制作するようになったのであろうか。さらに建設資金が選挙干渉資金に流用されたあと、七年後に建設委員長を引き継いだ深野一三知事が、佐野前励師ら日蓮宗徒の協力を得るには宗祖を迫害した北条時宗よりも亀山上皇が碑上に奉安されたほうが良いと決断したと思われ、恒順師は報恩講話において、祖師が往生されて十一年目の文永九年（一二七二）に下した亀山天皇の諭旨に、祖師の化導について書かれていることを触れ、「真に実地にかけた、有難い御教化である」と話している⁶⁷。ここからも、亀山上皇を少なからず慕っていたと思われる七里恒順師にとつて、武將騎馬像よりも亀山上皇像に決定されたことは朗報だったと思われる。

この稿作成に際して福岡県立美術館および福岡市博物館学芸課と福岡市史編さん室のご協力を得た。記して感謝申し上げます。

【注】

(1) 山崎朝雲（一八六七―一九五四） 博多櫛田前町（現・福岡市博多区冷泉町）生まれ、近代木彫家、高田又四郎と高村光雲に師事、木彫に西洋式彫刻法を導入した写実的作風、文展審査員、帝室技芸員。

(2) 木造亀山上皇像原型は正力松太郎氏が所蔵し東京稲城市にあるよみうりランド聖地公園に保管公開されていたが、近年福岡市東区宮崎宮

に寄贈され同宮境内にて公開されている。

- (3) 谷口清八(一八四五～一九一一) 佐賀長瀬町生まれ、代々の佐賀藩御用鑄物師、一八九二年に谷口鉄工場設立。

- (4) 谷口源一郎(?～一九一五) 佐賀生まれ、鑄物師、谷口清八の嗣子、建碑事務所との連絡に奔走。

- (5) 竹内久一(一八五七～一九一六) 江戸生まれ、東京美術学校彫刻科教授のときに古彫刻の模刻ならびに修復に専念、一九〇二年の菅公一千年大祭のとき菅公像一〇〇〇体を制作。

- (6) 岡崎雪聲(一八五四～一九二二) 京都伏見生まれ、鑄金家、上野の西郷隆盛像や宮城前の楠木正成像などを鑄造。

- (7) 湯地丈雄(一八四七～一九一三) 肥後生まれ、福岡県警部長(今の署長)、愛国心や護国思想醸成のため元寇記念碑建設のため職を辞して全国各地にて講演をおこなう。

- (8) 佐野前助(一八五九～一九二二) 江戸生まれ、鎮西本山身延山本佛寺中興の祖、日蓮宗宗務総監、日蓮上人銅像建設に尽力、画家矢田一嘯に「蒙古襲来絵図」全一四図(福岡県指定文化財)を依頼、福岡県知事のと北海道長官になった河島醇の勧めもあって北海道に法華村を開く(高橋兼祐「寺院調査レポート 北海道日宗法華村について」)。

- (9) 『福岡日日新聞』明治十九年八月十九日二頁。

- (10) 『福岡日日新聞』明治十九年八月二十四日。

- (11) 神吉秀成 福岡日日新聞社記者、のち元寇記念碑建設事務所評議員。

- (12) 『福岡日日新聞』明治二十一年二月十日。

- (13) 映画が普及するまで幻燈は庶民の大きな楽しみだった(湯本豪一「幻

燈」『図説明治事物起源事典』二二八頁 一九九六年)

- (14) 矢田一嘯(一八五八～一九二三) 横浜生まれ、洋画家、渡米して伊人カッペレットイに透視画法を学ぶ、一八九四年頃来福し元寇記念碑建設に賛同して講演に使う大画面の蒙古襲来画を制作、東公園パノラマ館の日本海大海戦などの大画面制作、日蓮上人銅像台座の法難図の原画を制作。

- (15) 安場保和(一八三五～一八九九) 第九代日福岡県知事、一八九二年の第二回衆議院総選挙で大規模な選挙干渉をおこない失職、二年後に避暑で来福したとき選挙干渉の旧夢を思い出しに来たのかと揶揄される。

- (16) 『福岡日日新聞』明治二十二年四月十五日。

- (17) 津田信秀 旧福岡藩士、在福岡退職陸軍中尉、元寇記念碑建設事務所事務委員、神官僧侶への義捐金募集担当、湯地丈雄らと建設地許可申請。

- (18) 江藤正澄(一八三六～一九一一) 秋月生まれ、神官、古器物蒐集および展覧会開催、午砲会社を設立し博多人の選刻一掃を計画、元寇記念碑建設事務所評議員補欠、神官僧侶への義捐金募集担当。

- (19) 渡邊 檀 福岡県庁兵事課長、元寇記念碑建設事務所事務委員、各地方部局への義捐金募集担当。

- (20) 香山俊久 元寇記念碑建設事務所事務委員のち事務長、来県者への義捐金募集担当。

- (21) 元寇記念碑建設事務所編「元寇記念碑来歴一斑(一)」『福岡日日新聞』明治三十七年十二月二十五日三頁。

(22) 同「元寇記念碑来歴一斑」(二)『福岡日日新聞』明治三十七年十二月二十七日三頁。

(23) 仲村久慈『湯地丈雄』一一四頁 一九四三年。

(24) 大谷光尊(一八五〇〜一九〇三) 浄土真宗本願寺派第二十一世法主、法名は明如、光瑞の父。

(25) 『福岡日日新聞』明治二十二年三月二十六日二頁。

(26) 明治二十一年六月十六日の委員会で寄付金募集及取纏方が決められ、神官僧侶の部は江藤正澄と津田信秀が担当することになった(『福岡日日新聞』明治二十一年六月二十日)。

(27) 日野澤依 浄土真宗本願寺派連枝、大谷光尊の実弟、大阪本照寺住職。

(28) 『福岡日日新聞』明治二十二年六月十一日二頁、同二十六日三頁。

(29) 『福岡日日新聞』明治二十三年一月二十一日二頁。『福陵新報』明治二十三年一月二十四日四頁および同二十五日三頁には「幻燈元寇大演説会」の広告がだされている。

(30) 川村 惇 福陵新報初代主筆、元寇記念碑建設事務所評議員。

(31) 香月恕經(一八四二〜一八九四) 夜須郡生まれ、医師、民権政社集志社を設立、玄洋社で教育担当、衆議院議員二期つとめる。

(32) 河野智眼(？〜一九一〇) 明石生まれ、称名寺(時宗)住職、博多大仏建立に尽力。

(33) 津田利夫 福岡市祇園町に住む、福岡区高等小学校校長、博多電燈会社支配人、中山森彦博士の美術同好会五月会の会員、福岡養老院設立。

(34) 大庭 弘 筑前協会員、一八八九年に条約改正中止建白書奉呈のた

め上京、福岡県会議員。

(35) 荻原種介 福岡日日新聞社社友、日本画家、写真技師、福岡高等女学校図画科教諭。

(36) 『福陵新報』明治二十三年一月二十四日四頁。

(37) 藤野良蔵 博多財界の親睦会である博渉会員、東公園博多座建設発起人。

(38) 『福陵新報』明治二十三年一月二十八日二頁。

(39) 『福陵新報』明治二十三年二月五日二頁。

(40) 『福岡日日新聞』明治二十三年二月五日二頁。『福陵新報』同年二月六日二頁は一五〇〇人以上に達したと報じている。また二月九日にも田中安太郎主宰の元寇演説幻燈会が西公園鐘美亭で開催されており、こちらも雨天に拘らず盛況であった(『福陵新報』同年二月十一日二頁)。

(41) 『福陵新報』明治二十三年二月六日二頁。

(42) 三吉利三郎 博多古門戸町住、福岡写真界の巨擘、長崎の上野彦馬のもとに來た米国写真師に会いに行ったりして明治時代福岡の写真草創期に写真技術の発展に尽力した、福岡医科大のエックス線撮影技師もする。

(43) 『福岡日日新聞』明治二十三年三月十二日二頁。

(44) 『福陵新報』明治二十三年三月十五日三頁、『福岡日日新聞』明治二十三年三月二十日二頁。

(45) 「元寇記念碑来歴一斑」(二)『福岡日日新聞』明治三十七年十二月二十七日三頁。

- (46) 大谷勝尊(一八五八〜一九一三) 東本願寺法務局執綱、浄土真宗
大谷派第二十一代法主大谷光勝(厳如)の第三子。
- (47) 『福岡日日新聞』明治二十三年六月三日。
- (48) 木山惟貞 元寇記念碑建設事務所事務委員、湯地丈雄らと建設地許可申請、観世流能楽者、黒田家家令。
- (49) 『福岡日日新聞』明治二十三年六月四日。
- (50) 湯地丈雄は明治二十三年三月二十二日付で官職を辞し裸一貫の素浪人になった(仲村久慈『湯地丈雄』四一頁)といわれているが、新聞記事では辞表を提出するが受理されず「非職」つまり休職あつかいとなっている(『福陵新報』明治二十三年三月二十三日二頁)。
- (51) 「叡聞」(天子がお聞きになること)に達したので宮内省より福岡県へ恩賜があったという(『元寇記念碑来歴一斑』(二)『福岡日日新聞』明治三十七年十二月二十七日三頁)。
- (52) 二十一年後の回顧記事に、安場知事時代の最大奇抜なできごとは明治二十五年の選挙干渉事件であり、最も悲しむべきことは元寇記念碑建設のために集められた浄財約一百万のほとんどが干渉資金に流用されたことで、さすがに宮内省御下賜金の千円には手を付けていないと記されている(『歴代知事の半面』(十二)『福岡日日新聞』大正二年六月二十八日三頁)。なお、当時各原警部長は直接中央の内務卿の指導監督下にあったので、選挙干渉の参謀長役を務めたのは中原尚雄福岡県警部長である(『福岡県警察史 明治大正編』五九九頁 一九七八年)。中原は元寇記念碑建設事務所評議員で、さらに明治二十五年五月には委員長の要職にあった(『元寇記念碑来歴一斑』(三)『福岡日日新聞』
- 明治三十七年十二月二十八日五頁)。
- (53) 「此時に方り義捐金の収纏漸く緒に就けり乃ち記念碑の設計を定め碑頂上に推戴する銅像模型の制作に着手す像は龜山上皇の尊像にして」(『元寇記念碑来歴一斑』(三)『福岡日日新聞』明治三十七年十二月二十八日五頁)とある。
- (54) 「感謝状」『元寇記念日蓮上人銅像誌』八九頁 日蓮上人銅像元寇記念館 一九三〇年。二十一年後の回顧記事に「(河島醇は)福岡県知事として安場知事時代に選挙干渉費として乱費されていた元寇記念碑建設費を整理してともかくその始末を着けたのは功績のひとつである」(『歴代知事の半面』(二十)『福岡日日新聞』大正二年七月一日三頁)とある。
- (55) 『七里和上言行録』では「称念寺」となっているが、僧朗が住職なのは「正念寺」。
- (56) 「勤学」は当時の教学の最高の位階で、現在の龍谷大学教授にあたるといわれる。本願寺派の学階課程は勤学、司教、輔教、助教、得業。
- (57) 曇龍(一七六九〜一八四二) 安芸生まれ、本願寺派の学僧、龍華学派の祖。
- (58) 北島道龍(一八二〇〜一九〇七) 紀伊生まれ、日本人で初めてブツダガヤなどの仏蹟巡礼、大谷光尊に重用され本願寺改革を試みるが失敗。
- (59) 大洲鐵然(一八三四〜一九〇二) 周防生まれ、維新後に島地黙雷らと西本願寺改革に尽力。
- (60) 福岡くらぶは明治十八年十二月に福岡商法会議所内に設立され、同

じころにできた博多部の博渉会と並立した。二十三年九月に解散して
いる。

(61) 『福岡日日新聞』明治十九年一月二十七日三頁。

(62) 『福岡日日新聞』明治二十三年二月四日二頁。

(63) 『福岡日日新聞』明治二十三年二月五日四頁、『福陵新報』同年一月
二十四日四頁、二月五日四頁。

(64) 『福岡日日新聞』明治二十二年八月九日。

(65) 濱口恵璋編『七里和上言行録』四〇一頁。

【註】

(参考1) 元寇記念碑建設義捐金募集広告(蒙古首切塚記念碑改称)

(福岡市博物館蔵)

紙本印刷 縦三〇・〇センチ、横五六・九センチ

明治二十二年(一八八九)

「元寇記念碑建設義捐金募集広告(蒙古首切塚記念碑改称)

我国古来外寇ノ事ヲ温ヌルニ三尺ノ童子モ蒙古襲来ノ当時ヲ言ハサルハ
無シ和漢年契ヲ閱スルニ弘安四年元大挙入寇擊塵_レ之ト彼至三元十八年師殲_レ
于大日本トハ即此役ナリ其顛末ニ至テハ載テ彼我ノ歴史上ニ昭々タルヲ
以テ爰ニ贅セス而シテ其現場タルヤ筑前國那珂御笠糟屋怡土志摩早良等ノ
数郡ニ跨リ博多湾ノ海瀬ニ沿ヒ当時ノ戦場ト称スルモノ各所ニ散在シ残堡
断塁猶ホ存スト雖トモ既ニ六百有余ノ星霜ヲ経桑滄モ昔ナラス好古有識ノ
士ニアラサルヨリハ之ヲ問フモノ稀ナリ僅カニ糟屋郡志賀島村海岸ニ蒙古

首切塚ト称スルモノ在ルモ一小丘ニ両三ノ松ヲ存スル而已ニテ土人ノ指点
ヲ求ムルニ非サレハ亦何物タルヲ知ルニ由ナシ嗚呼空前絶後如此外寇ノ衝
ニ方リ勁敵ヲ海隅ニ窮追シ將ヲ屠リ士卒ヲ塵シ彼ノ不世出ノ豪雄ヲ以テ宇
内ヲ睥睨シタル元ノ世祖忽必烈ヲシテ肝膽寒カラシメ日本ノ威烈ヲ海ノ内
外ニ輝シタル名蹟ヲ独リ土人ノ口碑ニ委シ之カ記念トスヘキ一片ノ石タモ
留メサルハ豈ニ遺憾ナラスヤ蓋シ四海同人均ク是人也誰カ其命ヲ重ンセサ
ラン唯タ国ノ為メニ輕キ而已誰カ後昆ナカラン彼レモ亦哭シテ天涯ヲ望ミ
弔祭向フ処ヲ知ラサルノ憾ナカル可ンヤ于茲広ク同感ノ士ト計リ一大記念
碑ヲ此地ニ建テ以テ古英雄ノ偉勲ヲ不朽ニ旌表シ魂魄モ亦帰スル処アラシ
メント欲ス殊ニ其海岸タルヤ汽船出入ノ咽喉ニシテ内外人過ル毎ニ要地名
称タルヲ稱賛嘆美スルノ海門タルニ於テヤ果シテ此工成ルノ後一目瞭然
観ル者自ら我國權ノ貴重スヘキヲ知り且ツ之ヲ擴張スルニ銳意ナルト同時
ニ将来ヲ警戒スル其効豈少小ナランヤ江湖愛國ノ志士希クハ幾分ノ資ヲ投
ケ賛成助力アランコトヲ

(予想図は高い石柱の頂に騎馬像がのっている) 記念碑の構造方ハ尚ホ技
術上ノ参考ヲ求ルニ付意見アル諸君ハ幸ニ勸告ヲ賜ヘ 騎者ノ形ハ銀行発
兌ノ一円紙幣表面戦鬪ノ図ニ基ク

建碑及義捐金募集手續之概略

○茲ニ図ノ如ク仮リニ構造法ヲ示スト雖賛成者益々多ケレハ規模益々大
ナルヲ要ス○義捐金の多少ヲ論セス有志者姓名ハ帳簿ニ録シ且新聞紙二掲
ケ其重ナル者ハ特ニ石若クハ銅ニ刻シテ共ニ不朽ニ存ス○義捐金ハ現住所
及生国共ニ明記シテ左之所ニ送付スヘシ

(義捐金取扱所) 東京 小舟町三丁目十番地 第三国立銀行、大阪府 大

阪高麗橋三丁目 第一国立銀行支店、大阪西区土佐堀裏町 第十七国立銀行支店、京都府 京都東洞院六角下ル所 商工銀行、京都新町通り蛸薬師三井銀行支店、兵庫縣 神戸栄町五丁目 第一国立銀行支店、滋賀縣 長濱 第二十一国立銀行支店、大津 第六十四国立銀行、福岡縣 福岡市福岡橋口町 第十七国立銀行

○送付之手続ハ銀行為替又ハ郵便切手ヲ以テ代用スルモ妨ナシ若他ノ便法ヲ設クルトキハ新聞紙上ニ広告スヘシ○数名連署ニテ送金スルトキハ各自金額ヲ明記アルヘシ但シ領収證ニハ筆頭姓名外何名ト記スルヲアルヘシ○建碑工事ノ着手落成ハ勿論其他重要ノ件ハ新聞紙上ニ広告ス○建碑落成後毎年元寇紀念会ヲ執行ス

紀念碑構造方概略

元寇紀念碑ノ総高ハ地盤上百貳拾尺基礎ヨリ高貳拾尺（内四尺ハ地盤以下）迄徑貳拾八尺ナル六角柱ヲ築キ其上部ニ徑貳拾尺高貳尺及徑拾六尺高貳尺ノ一圓ヲ設ケテ柱脚トシ高廿九拾尺下徑拾貳尺上徑七尺五寸ノ円柱ヲ建テ頭上ニ高五尺ノ銅像ヲ置クモノナリ如此キ建築物ノ寸法及構造法等ハ単ニ其建設地ニ流行スヘキ風力ノ強弱ニ依リ加減スヘキモノナリト雖モ素ト此福博ノ地タル氣象台等ノ設アリテ其風力ヲ觀測シタル例ナキカ故今之カ参照比準ヲ求ムルニ由ナシ依テ熟ラ考フルニ此地タル北ハ海ニ浜シ南ハ山遠ク四開稍広濶ナルヲ以テ其風力モ稍強大ナル知ルヘキノミ然リト雖古來未タ風力ノ以テ砂石ヲ飛轉シ木材ヲ吹揚シタルヲ聞カス只崇木ヲ倒スヲ以テ最大強風トセリ此風力欧米諸州ノ実験ニ照シ考フルニ其速力一時間七十五英里（凡ソ我三十里）ニシテ其依テ起ルヘキ圧力一尺平方面ニ二十五磅ナリトス故ニ右ニ記スル寸法ハ此風力ニ堪ユルヲ目的トシテ算出セルナ

リ而シテ其構造ハ別紙図面ニ示ス如ク先地盤以下拾尺ヲ掘鑿シ松杭ヲ二尺間ニ折入シ上厚六尺ハ杭間ニ栗石ヲ白キ入レ格子柵ヲ杭頭ニ設ケ其上ニ厚六尺ノコンクリートヲ敷キ基礎トシ上部円柱ニ至ル迄総テ切り石ヲセメント泥沙ヲ以テ中心空筒ニ築キ六角柱ニ入口ヲ設ケ車仕掛ケヲ以テ自由ニ柱頭ニ昇降スルヲ得セシム而シテ地盤ヨリ高九尺ハ通常亀甲築石垣ヲ以テ周圍ヲ包ミ上部ニ敷石ヲナシ周圍ニ鉄柵ヲ設ケテ乱リニ柱下ニ近ク「能ワサラシム

筑前国福岡市天神町八十七番地

元寇紀念碑建設事務所

（各地出張所）

○東京麹町区上六番町三十五番地 同出張所 ○京都知恩院門前袋町

同出張所 ○大阪土佐堀裏街八拾番地 同出張所 ○山口県赤馬関觀音崎

町廿八番地 同事務所 ○広島県京橋通鉄砲町 神道分局 同出張所 ○

同県油屋町 明教寺 同出張所 ○同県広島市搦屋町仏教講義所 同出張

所 ○広島県広島市左官町明項寺 同出張所 ○長崎縣長崎市諏訪町四拾

九番地 同出張所 ○同県同市白島万行寺 同出張所 ○兵庫縣神戸市東

川崎町 同出張所

元寇紀念碑建設發起人並賛成員

九州發起人ノ部 九州部ハイロハ順 池野逞藏 石黒五十二 岩佐專太

郎 猪鹿倉兼文 磯野七平 井上侃齋 井手昇 伊藤六右衛門 長谷川好

道 原田種徳 林寛一郎 西高辻信嚴 西村源次 富岡敬明 十時參吉郎

土岐小次郎 頭山満 小野隆助 小河久四郎 大森豊治 小笠原壽長 尾

崎臻 大山與四郎 岡部覺 大野未來 渡邊檀 渡邊村男 香山俊久 加

藤惠澄 河内幸七 蒲瀬龍平 笠井愛次郎 川上房申 川村惇 河野智眼

加藤日龍 神吉秀成 吉田萬之助 吉田鞆二郎 横田利兵衛 吉留桂 高

橋新吉 高千穂宣磨 丹増良 龍淵東藏 竹田實行 津田信秀 月形潔

中原尚雄 中田時懋 中村巨訓 中尾伊作 中尾卯兵衛 養鷗徹定 野村

祐雄 黒岩知新 倉八隣 山地元治 安場保和 安田宗則 山崎忠門 山

形修人 山中立木 八重野範三郎 山崎藤四郎 正木昇之助 松浦格彌

深澤伊三郎 遠藤甚藏 江藤正澄 姉川行道 葦津磯夫 縣連 新井眞道

齋藤美知彦 齋藤千五郎 木山惟貞 湯地丈雄 紫藤猛 下澤善右衛門

樋口利作 樋口競 日隈實譽 七里恒順 平岩銳藏 門司軌 関谷九郎

瀬戸惣太郎 諏訪楯木

東京特別御賛成 伏見貞愛親王 北白川能久親王 小松彰仁親王 村雲

日榮尼王

東京發起人ノ部 香川敬三 小澤武雄 千家尊福 堀江芳介 藤浪言忠

末松謙澄 清浦圭吾 丸山作樂 嶋地黙雷 萬里小路通房 小松原英太郎

春田景義 東園基愛 廣橋賢光 横井時敬 岡本監輔 石村貞一 福澤重

香

賛成員 大隈重信 山田彰義 井上馨 鳥尾小彌太 谷干城 四條隆平

小牧昌業 三間正弘 北代正臣 南光利 牟田口元學 楠正位 今村清之

介(ママ) 諫早千吉郎 丹羽維孝 小川興社 東京日日新聞社関直彦 東京

電報社陸實 東京新報社朝比奈泉(ママ) 日本國教大道社川合清丸 日本人

政教社辰巳小次郎 毎日新聞社遠山雲藏

大阪發起人ノ部 高島鞆之介(ママ) 建野郷三 遠藤謹助 今井良一 高

崎親章 佐藤暢 宮崎鐵幹 加藤海章 立石包正 柴景起 藤田傳三郎

磯野小右衛門 廣岡信五郎 阿部彦太郎 松本重太郎 田中市兵衛 九原

庄三郎 中江篤介 柴四朗 菊池侃二 熊谷長太郎 伊庭真剛 寺村富榮

桑原深道 藤田京太郎 春田源之丞 兼松房二郎 玉手弘通 河原信司

土居通夫 芝川又右衛門 土井彦一郎 天野皎 五代龍作 進藤嘉一郎

齋藤嘉七 西田永助 岡橋治助 小林八郎兵衛 田村太兵衛 永田仁助

野田吉兵衛 緒方拙齋 栗原亮一 竹内正志 織田純一郎 小島忠里 砂

川雄峻 岡崎高厚 大藤高敏 森作太郎 鳥井駒吉 肥塚與八郎 浮田桂

造 粟谷品三 藤林寛 西山久兵衛 金澤二兵衛 田邊貞吉 山口幸七

細原清太郎 石橋榮太郎 岡田多祐 古谷宗作 佐野與兵衛 橋本孝良

澁川忠二郎 豊田文三郎 猪飼史郎 前川楨造 大三輪長兵衛 小森藤吉

郎 佐伯勢一郎 松村九兵衛 矢野亨 本山彦一 上野理一 大澤大輔

岡崎眞七 園田多祐

賛成人 廣瀬峯平 鴻池善右衛門

京都特別御賛成 久邇朝彦親王

京都發起人ノ部 北垣國道 尾越蕃輔 森本後凋 財部羌 杉浦利貞

武村藤兵衛 有吉三七 田中原太郎 西村七三郎 富田半兵衛 古川吉之

助 西堀徳次郎 川勝光之助 田宮勇 野尻岩次郎 大久保誠知 河原林

義雄 上野彌一郎 富永冬樹 曾根誠藏 濱岡光哲 鮫島盛 大洲鐵然

渥美契緑 山中利右衛門 内貴甚三郎 河村清七 雨森菊太郎 宮城坎一

久志木常琢 大野省内 村上市太郎 熊谷直行 谷鐵臣 頼又次郎 服部

直 大坪格 池上勝太郎 児玉友介 内貴清兵衛 下村正太 岡本治助

渡邊伊之助 池上彌右衛門 船橋繁之助 稲垣藤兵衛 野橋作兵衛 辻見

四郎 安盛善兵衛 井上治門 膳仁三郎 藤原忠兵衛 柏原孫兵衛 上田

清兵衛 山田定兵衛 山田定七 下村忠兵衛 西村治兵衛 遠藤九左衛門

市田理八 江馬天江 四條永福 谷川政美 竹中節 眞鍋本年 河野道昇
 山口正邦 橋本幸正 大野正忠 羽田信明
 賛成員 日野澤依 土井普惠
 広島県賛成員 千田貞暁
 香川県賛成員 松崎保好 木内平八
 兵庫県發起人ノ部 内海忠勝 川崎正藏 石田貫之助 北風正造 頼川
 君平 田中元三郎 折田年秀 小川鉞吉 小寺泰次郎 深田清兵衛 下河
 邊貫四郎 佐畑信之 水越成章 矢野寅一 鹿島秀麿 徳田利彦 内藤利
 八 魚住逸治 竹内清一 名倉次 丸岡寛三郎 飯田三郎 濱田儀一郎
 牧野耕三 神田兵右衛門 岡田元太郎 直本政之助 中西市藏 生島四郎
 兵衛 高瀬藤次郎 村上定 米澤吉次郎 善積順藏 有馬市太郎 柏木庄
 兵衛 魚住惣左衛門 鳴瀧幸恭 赤木義彦 武田達三 米村忠兵衛 西尾
 三郎兵衛 波都元次郎 山川豊之進 園田龜藏 小林常三郎 森元莊三郎
 中道伊兵衛 安藤直記 今村金兵衛 山田嘉右衛門 法貴發
 滋賀県發起人ノ部 中井弘 園田安賢 小野徳太郎 片岡直温 七里定
 嘉 中西秀夫 高谷光雄 伊藤紀 藪田勘兵衛 古望二兵衛 北村仁兵衛
 堀江義尊 谷澤龍三 林田勝九郎 中山勘三 中小路與平次 岡田逸次郎
 鶴飼退藏 馬場新三 八田四郎次 原田義圓 西村時彦 浅見又藏 柴田
 源七 川島宇一郎 伊藤徹 武内稱 久保敏樹 児玉春房 木村廣凱 長
 山信順 山村總俊 武藤貫治 弘世助三郎 廣野鐵造 田部全次郎 浅見
 竹太郎 下郷傳平 河路重平 石井四郎平 高田義甫 西川重盛 成宮珍
 次郎 阿部市郎兵衛 西川貞次郎 中村治兵衛 田村正寛 小泉新助 西
 澤左衛門 高橋長兵衛 北村嘉十郎 村木久兵衛 岸善明 野村綱次郎
 荻田久吉 鹿島長二郎 尾木泰一 細井薫 藤野原平 繁岡欽平 門野主
 造 西堀龜次郎 村田熊吉 高田吉左衛門 三浦登代治 西坂孫四郎 野
 神誠一 澤居忠右衛門 岩島五左衛門 福田彌三郎 吉川忠治 岡田伊平
 田附新助 藤野嘉平 平田傳右衛門 珠玖清六 松居文右衛門 村山久平
 小林喜平次 治内海市二郎 沖良賢 田村勝昌 棚橋續 野津毅 川南重
 祐 松浦翠 手原利吉 山村幸右衛門 多良厚次郎 小森五右衛門 志賀
 盛美 高田友平 溝江五郎 大菅吉太郎 大澤伊右衛門 市田喜兵衛 市
 田鋼平 眞弓村晴 吉川眞一 増田正章 松本茂九郎 福原維淳 川島敬
 正 磯部龜吉 野村蘭 松居吉右衛門 櫻井七右衛門 辻源兵衛
 茨城發起人ノ部 安田定則 藤健 加藤敬頼
 愛知發起人ノ部 勝間田稔 門田忠行 安田宗則
 岡山県發起人ノ部 千坂高雅
 同賛成員 黒住宗篤 森下景端 高見日昌 千葉惟海
 広島県發起人ノ部 野津道實 大沼涉 堤正巳 千田貞暁 友田美喬
 鹽屋方國 竹橋尚文 石井忠恭 林隼之助 柴直言 長瀬時衡 横裨盛敏
 遠藤達 村上義雄 福田繼之 和田泰一郎 松永正敏 四宮信應 木村起
 善 志和地堯行 吉江磨礎記 李家文厚 伍堂卓附 松下直美 大野津雲
 遠藤洋 田中種光 奥宮正治 池永端 大河内輝剛 佐宮清 栗原幹 岡
 田吉顕 杉山新十郎 三浦義建 中尾正名 中屋松太郎 名越巖莊太 松
 浦唯次郎 小島純一郎 山口光鳳 池田秀一 七里千濤 脇榮太郎 山内
 吉郎兵衛 岡謙藏 三上一彦 岡田俊助 保田八十吉 井東幸七 森文喜
 早速勝三 粟村信武 中川増鳳 松尾天然 満田了誓 上園総持 守良喜
 貝塚新八 後藤静夫 森田幹夫 森川修三 渡邊又三郎 河野葦一 瀬良

喜助 松本清介 尼子忠藏 大高十郎 村山茂八郎 山田養吉 能美圓乘
岡無外 櫻井毅 渡邊嘉藏 世良宗誠 藤島教重 藤井稜威 平野唱宗
志熊直人 横山秀吉 津川右弓 岩本元行 斎藤爲信 斎藤春香 森田寛
藏 井東平助 瀬川岩藏 近田宗兵衛 熊谷寛本 佐々木高榮 富永省吾
大館励等 頂岳立寛 岩崎永介 山科幹三 藁武八 山中正雄 岡崎仁三
郎 長沼鷲藏 岡野七右衛門 寺尾小八郎 綾藤田三十郎 濱田治兵衛
白根淳六 岩崎政介 桐原恆三郎

外国賛成員ノ部 独乙国ハールムシヨアツテル 同国フニスカ 同国
ヘーン 英吉利国エマークス 同国バルトン 伊太利国エルコンタレリ
同国ゴ井ジュエツタ 清国張徳澄

欄外頭に「日本全国府県議會議員へ特送ノ部」とあり、同末尾には「明治
二十二年七月調べ」「筑前福岡元寇紀念碑建設事務所」とある。裏面には欄
外頭に「此表ハ元寇紀略其他ノ諸書ヨリ摘採シ当時ヲ想像スルニ便ナラシ
ム」と書かれた、寛仁三年（一〇一九）の刀伊の入寇より永仁三年（一二
九五）の薩摩甌島に元船一艘が出現したが入寇はなかったまでの年表と「蒙
古襲来の歌」「軍歌」などが一面に掲載されている。

（たなべ たかお 人間文化研究所客員研究員）

博多萬行寺七里恒順師の元寇紀念碑建設運動

田 鍋 隆 男

筑紫女学園大学
人間文化研究所年報

第三十号 二〇一九年